

家庭訪問ボランティアとしてのメンタルフレンド体験の報告と考察

Report and Consideration of Mental Friend Experience as Home Visiting Volunteer

大谷 桃子

跡見学園女子大学大学院
人文科学研究科臨床心理学専攻

Momoko Otani

Division of Clinical Psychology,
Graduate School of Humanities,
Atomi University

要 約

本論文は家庭訪問ボランティアとして依頼されたメンタルフレンド活動の事例報告である。小学校高学年、中学年、低学年の3きょうだいを対象に3か月間、全3回の家庭訪問を行った。遊びや飼い犬を通したコミュニケーションを行うことで、ラポールの形成を目指し、関係性の構築を図った。第3回の家庭訪問では筆者の送迎により子供たちが1年ぶりに塾へ行くことができ、社会との繋がりを結ぶ手伝いができた。たった3回の支援ではあったが、関係性の発展や子供たちの成長が見られたため、支援対象者をアセスメントし、かわり方を模索することの意味深さを実感する事例であった。考察は「子どもを支える役割」、「子どもの興味や関心を広げていく役割」、「子どもの生き方のモデルとなる役割」、「子どもと社会との接点としての役割」の4つの視点(金井, 1997)から行った。

【Key Words】メンタルフレンド, 不登校, アウトリーチ, 家庭訪問

I はじめに

近年、不登校・児童生徒の増加は深刻化しており、平成30年度の文部科学省調査によると不登校の小学生・中学生数は調査以来過去最高の16万4,528人となった。前年度の調査から2万人以上の増加が見られ、問題解決のために早急な対応が求められている。

不登校児への支援として、教員やスクールカウンセラーによる家庭訪問は長年行われてきた。また、1991年からは厚生省が全

国の児童相談所に活動要請の通達を行い、事業の一環として、「ふれあい心の友(メンタルフレンド)訪問活動援助」が始められた。メンタルフレンドとは、ひきこもりや不登校状態の子供たちの兄や姉に該当する年代の若者が、子供達とふれあい、心の成長をサポートする活動である。伊藤(1999)はメンタルフレンドへの期待として、「学校への復帰や家族関係の改善などの目に見える治療的効果よりも、人間関係を体験したり広げることが主眼である」としている。また、金井(1997)はメンタルフレンド

の役割を「子どもを支える役割」, 「子どもの興味や関心を広げていく役割」, 「子どもの生き方のモデルとなる役割」, 「子どもと社会との接点としての役割」をあげている。

メンタルフレンド事業は児童相談所を中心に拡大し, 現在ではメンタルフレンド事業に特化したNPO法人も作られ, 子供たちに行うアウトリーチの一つとして代表的な支援となった。支援の拡がりに伴い, メンタルフレンドの活動状態を調査した報告や, インタビュー調査をした報告などが複数行われている。また, メンタルフレンド自身の主観的体験を報告した論文もある。しかし, 実際の事例を用いて報告と考察を行なった論文は未だ少ない。

そこで, 本論文では関東圏のNPO法人により依頼されたメンタルフレンド活動の実際の事例を取り上げ, 筆者の活動体験の報告と考察を行う。

II 事例の概要

倫理的配慮

本論文を執筆するにあたり, 個人を特定できるような性別や名称, 文言を避けることに配慮するとともに, 援助機関に論文の趣旨を説明し, 了承を得た。

1. 対象

小学校高学年, 中学年, 低学年の3名の児童。

2. 家族構成

単身赴任の父親, 母親, 第一子(小学校高学年), 第二子(小学校中学年), 第三子(小学校低学年), 飼犬。

3. 訪問に至るまでの経過

第二子の五月雨登校と第三子の完全不登校を心配した母親が, 「遊び相手や話し相手をお願いしたい」と訪問を依頼した。第二子, 第三子ともに買い物などの外出はできる。

4. 援助機関

関東圏のNPO法人。援助機関の匿名性を高めるため, 左記のように記載した。

5. 訪問のペース

1~2週間に1度, 1回2時間程度。半年間の訪問を予定していた。

6. 訪問した期間と回数

201X年の3ヵ月間, 実際の訪問回数は3回。

III 事例の経過

〈 〉は筆者の発言, 「 」はその他の発言である。

【第1回目】

支援開始1ヵ月前, 援助機関から活動の要請を受けメンタルフレンドとして家庭に派遣されることが決定した。筆者が本事例を担当することになった要請理由は, これまでのボランティア活動により, 子供に慣れていること・第三子の趣味であるお絵かきが特技だったからである。第1回目はこれから支援に入るにあたり, 家庭に直接伺い, 挨拶を行った。母親と第二子, 第三子が在宅。第一子は登校していたため不在。母親と第二子は丁寧に挨拶してくれたが, 第三子はイヤホンをしており筆者の方を見なかった。第三子の側に立ち寄り, 声をか

けたが反応は得られず、打ち解けるまでに時間を要するだろうと少々不安に思った。挨拶後、第二子は積極的に話しかけてくれたが、第三子はイヤホンをしながら布団をかぶって寝ていた。その様子を気にした母親と第二子が懸命に起こそうとしてくれたが、見守る旨を伝えた。

第三子が起きるまで、第二子と一緒にアニメ映画を見た。率先して機器の操作をしてくれたため、お礼を伝え〈すごいね、慣れてるんだね。すぐ見れちゃうんだ。〉等と褒めた。流暢にコミュニケーションが取れる印象を受けたが、様子を伺うためクローズドクエスションを活用し関係性の構築に努めた。こちらに対し、「これ見たことある?」、「いつも見てるの。」などの自発的な発言も見られたため、自由度の高い質問を投げかけるようにした。〈どのキャラクターが好きなの?〉、〈続きのお話はあるの?〉などと会話していると、気になったのか第三子が布団から顔を出した。未だにイヤホンをしていたため、目は合ったが、話しかけることはせず微笑むことに留めた。微笑んだところ、首を横に振りスマートフォンをいじり始めたが、体は布団から出ていた。拒絶ではないだろうと解釈し安堵したが、急激に距離を詰めることで恐怖心を与えないよう、引き続きアニメ映画を見ながら第二子と会話を続けた。

第二子が母親に用事を頼まれその場を離れたため、犬を撫でながら待つことにした。興奮した犬が筆者に飛びかかろうとした際、第三子が「だめ!」と犬を叱りつけ起きてきた。やや口調が厳しい印象を受けたが、〈ありがとうね、びっくりしちゃったから助かったよ。〉と伝えたが返事はな

かった。しかし、その後二人で犬を撫でられるようになり、先程に比べ場を共有している感覚を掴むことは出来た。同じ空間にいること、第三子に対し関心があることを伝えたかったため〈かわいいな〜〉、〈この犬種初めて見たなあ。〉等と独り言を発するよう心掛けた。返答はなかったが、餌を持ってきたり芸をさせたりと、こちらからの反応を求める様子が見られた。〈お腹すいてたのかなあ〉、〈こんなこともできるんだね!〉等の返答が不要なものから、〈芸は教えたの?〉、〈ワンちゃんの名前は何ていうの?〉等と段階を上げながら質問を行った。犬の名前が一度で聞き取れず、ドキドキしながらも〈もう一回教えてくれる?〉と聞くと、前よりもはっきりと答えてくれたため嬉しく思った。他にも母親から頼まれ犬のしつけをしていること、散歩の頻度や好きな餌などを教えてくれた。活動終了時、〈またワンちゃんと遊んでいい?今度は私にもお座り教えてくれる?〉と伝えると了承してくれた。コミュニケーションの緩衝材として、飼い犬が資源になると考えられた。

【第2回目】

約束した時間にインターホンを鳴らしたが、反応はなかった。生活音が聞こえたためその場で待機していると、第二子が鍵を開けてくれた。母親と第一子が口論をしており、家庭内の状況としては落ち着いた様子がない様子が伺えた。筆者が部屋に入ると母親が挨拶をしてくれ、第一子と第三子にも挨拶するよう声をかけてくれた。第一子は初対面であったが、警戒する様子なども無く、自己紹介し合うことができた。第三子も目線を合わせ会釈してくれ、前回よりも

緊張していないように見られた。

第一子と第二子が宿題を始めたため、第三子と共にお絵かきをすることにした。第三子が漫画本の模写を始めたため、〈すごーい！上手だね。〉、〈そっくりだね。〉などと声を掛けた。言語での反応はなかったものの、描いている様子がよく見えるよう、こちらに体を向ける様子などから声掛けを好意的に捉えているのだろうと感じた。筆者が〈私も何か描こうかなあ。〉と呟くと自らペンを差し出してくれた。第三子の興味・関心があることに焦点を当てるため、〈お絵かき好きなの？〉、〈漫画も読むの？〉などと声をかけると「うん。」と返事をしてくれた。短文ではあったが表情は明るく、筆者の緊張感も解けたように思う。

宿題を終えた第一子がこちらの様子を伺いに来ると、第三子は煙たがる様子を見せた。第一子が絵を覗き、「全然似てないじゃん。」「自分の方が上手く描けるよ。」と言うと口喧嘩に発展した。喧嘩を仲裁し、〈私はすごく上手だと思ったよ。〉と伝えたが、第三子は第一子に「うるせえ！」「ばか！」「来んな！」などと怒鳴っており、なだめることに難しさを感じた。第三子の手が出そうになったため、二人の間に座り、物理的な距離を取るようにした。その後、母親の介入もあり喧嘩は収まったが、第三子の機嫌はなかなか直らなかった。口喧嘩に負けた第三子の苛立ちは、第二子やペットに向くようで、叩いたり暴言を吐く様子が見られた。家庭内ではよくあることらしく、第二子も気にしていないようであったが筆者としては少々動揺してしまった。第二子にこっそり〈大変だったね。〉、〈大丈夫？

痛くなかった？〉と労うと、「(第三子の力が)弱いから別に。」とのことであった。しかし、第二子のどこかあきらめたような表情に筆者は漠然とした不安を感じ、どのような声掛けが適切であったか悩んだ。

第三子が落ち着いてからは、第二子と手押し相撲をし、子供たち同士で楽しく遊ぶ様子が見られた。筆者は実況中継を行い、存在を認識されるよう心がけた。第三子は体を動かす遊びをしたことで怒りの表出ができたのか、表情が豊かになり自発的な発言も出てくるようになった。また、何か質問を投げかけた際は単語を答えるだけでなく文章的に答えるようになっており、関係性の進展を感じた。

活動終了時は第二子が玄関まで送り届けてくれた。第二子は母親の手伝いもよく行い、第三子の遊び相手にもなっているため、家庭内での負担や役割が大きいだろうと推測される。第二子が板挟み状態になっている可能性に留意し、支援を続けるよう考えた。

【第3回目】

第二子が玄関の外で座り込んでいた。一緒に室内に入ると、母親から子供三人を塾まで送迎してほしいとの要望があった。今回要請されたメンタルフレンド活動は自由度が高く、保護者の承諾が得られれば外出が自由に行える。送迎を承諾し〈じゃあ行ってみようか？〉と声をかけると第二子と第三子は一年間塾に行っていなかったこともあり、かなりの難色を示していた。第一子も行き渋りをしており、介入には工夫が必要だと感じた。母親が促し続けると第一子と第三子はお互い「お前が行け。」と言いつつ言い合うようになり、険悪な雰囲気

た。喧嘩に発展しないようしばらく見守っていると、第一子が「具合悪いから行きたくない。」と言い、別の部屋に移動した。第三子は「あいつ嘘ついてる。」などと言いながら、犬を撫で始めた。筆者も一緒に犬と遊びつつ、塾に対するクローズドクエスションを行なった。質問には答えてくれたが、苛立ちが収まらないらしく犬を叩いたり叱り飛ばす姿が見られた。〈ワンちゃん痛いんじゃないかな〉、〈ワンちゃんびっくりしちゃうんじゃない?〉などと伝えると、攻撃的な行動はなくなった。しかし、その後も犬が吠えるたび「黙れ!」と大きな声を出していたため、第三子のストレス発散の矛先は犬なのだろうと推測できた。

30分ほど行き渋りした後、第二子と第三子は塾へ出発した。第二子が自転車に乗り、第三子と筆者はその後ろを歩いたが、距離ができてしまった。第三子は第二子に置いていかれた感覚があるようで少し拗ねていたため、気持ちの立て直しとサポートを行うことにした。〈どっちが先に着くか競争する?〉と聞くと勢いよく頷いたため、〈よーいどん!〉と走った。走りながら、〈早いなあ〜!〉、〈どうしよう負けちゃう〜!〉と言い、到着してからは〈足速いんだね〉、〈格好良いなあ〉と声を掛けた。返答はなかったが、筆者に勝ったことが嬉しいようで第三子は笑顔でジャンプをしていた。第一子、第二子共に塾では楽しそうに間違い探しなどの課題を行っていた。講師や筆者からの「すごいね。」「よくできたね。」「頑張ってるね。」等の声掛けには恥ずかしそうにしていた。第三子が課題を終えた際、ハイタッチを要求すると

目線を合わせた状態で応えてくれ非常に嬉しかった。「簡単だった。」などの自発的な発言もあり、塾への送迎によって親密さが強まった感覚があった。出発時のモチベーションと集中力の問題から、滞在時間は30分程度だろうと予想していたが、結果的に1時間程勉強することができた。講師が「また来てね。」と伝えると、第二子、第三子ともに返事をしており、手応えがあったようだった。

この経験から、子供達は周囲からの支援があれば、十分に能力を発揮できるのかもしれないと強く感じた。完全不登校状態が続く第三子にとって、塾は貴重な外の世界である。家庭内でのふれあいも重要視しつつ、外の世界と繋がり続けられるよう支援の中に送迎も取り入れようと考えた。

【第4回目】

家族の体調不良を理由に当日3時間前にキャンセル。

【第5回目】

家族の用事があることを理由に当日30分前にキャンセル。

【第6回目】

母親と連絡がつかなくなる。

【支援の終結】

1ヶ月ほど連絡がつかなかったが、援助機関の調べにより転居したことが確認された。転居に伴い、中断という形で終結した。

IV 考察

1. メンタルフレンドの役割について

まず金井(1997)が挙げたメンタルフレンドの4つの役割の視点から考察を行う。

1) 「子どもを支える役割」

第一子や第二子は言語でのコミュニケー

ションが滞りなく行えるため、言葉を用いて支えるよう意識した。学校帰りの第一子には「学校頑張ったね。」と労い、訪問時に毎回出迎えてくれる第二子には「いつもありがとう。」と伝えるようにしていた。言葉のやりとりが少ない第三子に対しては、見守っていると言う感覚を伝えなかったためノンバーバルコミュニケーションを用いるよう心がけた。表情や声のトーンを意識し、安心感を持ってもらえるよう努めた。また隣に座る際は、ぴったり隣り合わせにならず、少し感覚を開け、寄り添うようにし、安全を脅かさない存在である事を伝えられるよう意識した。

2) 「子どもの興味や関心を広げていく役割」

子供たちの表情を観察し、遊びや課題を楽しそうに行っていた際は、ポジティブな声掛けを逐一行うよう心がけた。ねらいとして興味や関心を広げることに加え、本人の得意なことへの自覚を促すことを目指した。具体的な声かけとしては「こういうことが好きなの?」、「こんなに上手にできるんだね!」などである。声掛けを行うと、子供達の表情も豊かになり一定の効果があるように感じた。特に第三子は、言葉での反応は少なかったものの、さらに褒めて欲しい・認めて欲しいといった行動をしており、関係性の構築にも効果があると感じた。

3) 「子どもの生き方のモデルとなる役割」

子供たちに接した回数が3回であったため、生き方を指し示すようなモデルになれたとは考えにくい。また、メンタルフレンドと言えど、筆者と子供たちとの年齢が一回り以上離れていたため、継続的な支援があったとしてもモデルになったかはわからない。伊藤(2002)もメンタルフレンドの機

能を子供たちと年齢が近いことによる「友達感覚」の関係で生じるものと考えている。一般的にメンタルフレンドとして活動する若者は大学生が多いとされているが、30歳未満の者を募集する機関もある。子供達と年齢差が大きい援助者の場合、メンタルフレンドとしてどのように機能するのか今後も検討する価値はあるだろう。

4) 「子どもと社会との接点としての役割」

メンタルフレンドとして子供たちと関わることそのものが社会との接点として機能していると考えられる。日常生活において、家庭内の大人以外との関わりがない子供たちにとって、筆者との関わりは新鮮さがあつたのではないだろうか。母親曰く、完全不登校の第三子にとって筆者は「久しぶりに見る大人」だったらしく、刺激になっていた可能性が推察される。また、送迎により子供たちと塾を繋ぐことで、社会との接点を増やすことができたと考える。第3回目の報告で述べたように、第二子と第三子が塾へ行けたのは一年ぶりであった。メンタルフレンドの活動には、学校復帰などの明確な目標設定は特に組み込まれていないことが多い。しかし、塾で講師らに支えられながら勉強をすることが学校復帰への手立てになった可能性も考えられる。

2. メンタルフレンドを通して学んだこと

次にこの活動を通して筆者が学んだことについて考察する。

筆者にとって、小学生のいる家庭へメンタルフレンドとして派遣されたのは初めてのことであった。これまでも高齢者や乳幼児のいる家庭への訪問支援は行ったことがあつたが、メンタルフレンドという立場で

の訪問は初めてであった。また、単発的な支援が多かったため、一つの家庭に介入し、長期的な関わりを目指すことも初めての経験であった。

筆者は家庭訪問型の支援において、ご家族に信頼感や安心感を持っていただくことを何よりも重要であると考えている。今回の支援では、基本的な言葉遣いや服装へのマナーを配慮しながらも、子供たちにとっては親しみやすいお姉さんのような存在でいられるようフレンドリーな態度も心がけた。さらに、継続的な支援だからこそ、母子関係やきょうだい間の関係を注意深く観察するよう心がけた。本事例はたった3回と回数的には非常に少ない支援ではあったが、関係性の発展や子供たちの成長が見られている。このような経過は、子供たちそれぞれの健康度や本来持つ力があってこそとも言えるが、支援対象者をアセスメントし、かわり方を模索したことにより得られたとも言えるだろう。筆者はこの事例の特徴として、家族それぞれのストレスが自分よりも力の弱いものへ向く傾向があるとアセスメントした。母親は反抗期中の第一子と衝突しており、第一子は八つ当たりをするように第三子に対して力を行使しているようであった。第三子のストレスは家庭の中で1番力の弱いペットに向かっており、家庭全体に広がる力の流れのようなものへ早期介入を行うべきだと考えた。また、第二子が環境調整役になることが多く、家族間の板挟みになっている印象を受けたため、第二子の心のケアを念頭に入れることも重要であると感じていた。アセスメントに基づき、力の流れが見えた際は静止役として物理的な介入を行いクールダウン

させたり、板挟みになる第二子にはねぎらう声掛けをしサポート的な姿勢を伝えられるよう努めた。

合計3回と数字の上では少ない回数に関わりではあったが、実際の家庭に赴き、家族に対する見立てと手立てを検討する勉強の場になったと感じている。また、訪問の回数を重ねるごとに子供達との親密さが高まったことや、塾への送迎に成功したと言うこともあり、継続的な支援ができていたらどのような展開があったのだろうかかと心残りがある。

当たり前のことではあるが、予定している期間、必ずしも支援を続けられるわけでは無いのだということを学ぶ機会になった。来所型のカウンセリングと同様、今行っている支援が今後も続けられる保証は無いのだということを身をもって実感した。今後も様々な形で心理支援を行うことになるが、支援の際は、「今この場でできる最大限のサポートとは何か」を考えながら、後悔のないよう支援に臨みたい。

付記

本論文を執筆するにあたり、NPO法人や個人を特定できるような名称や文言を避けることに配慮するとともに、援助機関に論文の趣旨を説明し、了承を得た。

謝辞

本論文作成にあたり、執筆をご承諾いただきましたNPO法人の皆様、ご指導いただきました跡見学園女子大学の野島一彦教授に厚く御礼申し上げます。

文献

- 伊藤美奈子(2002). メンタルフレンド活動による不登校児童の変化—不登校のタイプとメンタルフレンド属性による比較—. カウンセリング研究, 35, 256-264.
- 金井雅子(1997). メンタルフレンドとはどんな役割を果たしているか. 児童心理, 51, 105-110.
- 河内浩美・中村恵子・小林正子・丸山公男・平川毅彦(2010). 「メンタルフレンド活動」におけるメンタルフレンド自身の主観的体験. 新潟青陵学会誌, 3(1), 53-61.
- 栗田明子(2014). メンタルフレンドの活動内容とその効果に関する考察—児童相談所への実態調査と事例研究—. 帝京短期大学紀要, 18, 175-183.
- 酒井 朗・伊藤茂樹・酒井順子(1999). メンタルフレンド(ふれあい心の友)—不登校児に対する援助の新しい試み—. 日本教育社会学会大会発表要旨集, 177-182.
- 坂本淳史・中野明德(2000). 不登校児の転帰に影響を及ぼす要因の一考察—メンタルフレンドとして関わった事例を通して—. 福島大学教育実践研究紀要, 39, 39-46.
- 厚生労働省報道資料(2019). 平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/10/__icsFiles/afieldfile/2019/10/17/1410392.pdf